

・カラー
・右面の下半分は大まかに描出
・掲載下さい。(前後写真の下に添付)

2,202^p - 2/3



① 1839^p - 7/11 ② 2909^p - 2/3 ③ 2979^p - 2/3 523^p

1409 写真図版 373 仁徳天皇陵 東側造出しの壕近くで見いだされた。

1309 百舌鳥回古市の陵墓古墳 大阪府立近飛鳥博物館、平成23年度秋季特別展

平成23年10月1日発行 41頁参照

經上
80°
1
±

42180
24

2316
2783839

記(黑)28^P
記上80
737

$$2,202^P - \frac{3}{3}$$

記(星) 29° ~ 30°
30 (3 記(星) 29° 紀上 80°

紀上80
視(望)29^P

$$\equiv 2$$

受月費

前方後圓墳の二を

であらう

女
 人
 の
 形

に
 よ
 り
 人
 か
 た
 ち

う、
とてみ
7/5 た

我々は通常

8月18日へののちさん

生う
も
う
ー

か
い
た
。

2	0	7	
---	---	---	--

山嶋を以て

柱、
二柱、

り。
旋め
り
、

122
81°

御柱の一二

で出会う

作者に遇あえ

三

声をかけた

20 2018/10/21

2,203P

1611P
紀上80P

更に紀上80P
廻り、御柱(聖)30P
三と

言ひ張の主張は

ことによりよう

ければならぬ理屈だ。それなのに、どうして
女であるおまえがさきに言ったのか、これは
よくないことだ。廻りなおそう
と言ひ張った。
■そこで、二はいらの神は更に御柱(礫)駒意
山島(しま)を廻って、また女陰の前で出会った。
■是の行は、陽神がまず唱えた。
「あなう小しや、美しい少女に遇えて」
■それから陽神は、陰神に尋ねた。
「おまえの身にできたのは何か」
■この問いに対して、陰神は女人の塚の洞窟
を指し示しながら對えた。
「ほら御覧下さい。私の身には、雌の元と
いうものが一個所々ありました。
■すると陽神は、女陰のすぐ前に高々と積み
上げられた薪の山の裾に小さく見える赤い火
を指さしてこう言った。
「わが身にも、雄の元というものが一個所
々なわった。それでは、わが身の元のところ
を以て、おまえの身の元のところに合わせて

こと

こと

おのころ島 紅 80° 28°
 2,204-1/2
 2250°

女陰の前の薪は小さな赤い火を千口千口と
 燃やし続け、細い煙りを愛する者の方へ
 そっとなびかせた。
 少女は、恥しういながらも、嬉しそうに打
 ち震えた。
 このようにして、陽神と陰神とは、愛を確
 かめあい、夫婦となることを固く誓った
 (神代紀上第四段本文参照)
 なるほど、
 弥生時代(当時)すでに、塚(御陵)が濠をめ
 ぐらした日鳥状にたのかどうか
 については今分らない。
 恐らく、後代の人々が、鳥のようには濠の中
 に浮んでいて、己の陵を見えて、
 日殿取意鳥(神代紀上第四段本文)
 と称したのであろう、と思われる。
 ② また、余談ながら、
 へ女陰の反対側の地点あたりには、陽神と
 陰神とが擦れ違う時に互いの姿があからさま
 に見えないうように、
 例え、垣根など

紀上81⁰注15

コクヨ ケー20 20×20

とある。

この歌は「本来、天皇国見の国讀めの独立
歌謡であつたろう」という。「古事記」新
潮社、二〇七頁「注十一」十六参照。

・「あは」か「たら」
淡路島から眺望すると、淡路島、淡路回
紀伊の間に在る友ヶ島（別名、伴島）
島、淡路島の属島「淡路島」（現在の神ノ島）
の古名「ヤ」
島に築いた高塚（など）が見える。

と「た歌意」なのか？
辞典「太田為三郎、名著出版人、磯野廬島、友
ヶ島」参照。
・「予の鋒」から「潮水」か「自」から「凝り
固まつて出来た島」
なのだから「仁徳記」には「自凝島」と書き表
わされてゐるので、なかうか「漢和辞典」
小林信明「小学館」へ「凝」参照。
・「但し、仁徳天皇在位中には、未だ、仁徳
天皇陵に存在してゐなかつたようである。

と
い
う
歌
か
あ
る。

言
を
こ
え

骨
と
言
は
め

わ
か
妻
は
ゆ
め

船
余
り

い
帰
り
来
む
ぞ

わ
か
骨
ゆ
め

王
さ
鳥
に
は
ぶ
ら
は

五
元
恭
記
に
下

の
歌
を
作
っ
た
の
だ
う
う

後
代
、
誰
か
か
、
仁
徳
天
皇
に
成
り
代
っ
て
、
こ

(「
三
編
『
歴
史
改
変
』
参
照
)

タイトル
「新也」
01-186

かいさい
掲載 673

2,205P-44

かほね
444P
なまから

と想察される

「王」で始まるこの歌は、元来、王を鳥
に葬る旅立ちの経験に基づく独立歌であつた
ろう、という。〔古事記〕新潮日本古実集
成、新潮社、二三の頁、注一〇の注記参照）
●「か」し、
へ王の屍を、海や川や池の中の自然の島に
葬る。✓
という（こ）が、そんなに多々あつたとは考え
にく。い。
●察するところ、ここに歌われている日島は
は、―――
めぐらした日御陵のことなの（た）うう、と
思ひまたる。
●「も」つとも、
歌が、
の、か、どうか、は、ついでに定かでないが、
と、も、あれ、いつの頃からか、―――
王は、日島に作られた御陵、つまり日己
御陵島に（磯取鹿嶋）に葬らるようになった
たの、だ、ら、う、

$$2.206^{p-1/2}$$

まだ 元
直ちに 1374^p

13.5

〇そして、この歌は、次のような意味であつ
 たろうか。
 王であるこの私を、島々、礫、馭、鹿、嶋、に葬
 るならば、船が砂の浜に著くと、き反動で少
 し戻るように、ちよつと隠れたう直ちに
 帰つて来ようぞ。言ひ伝えによると、
 旅立って行った者の畳（敷物・寝床）を
 汚すと、その人に異変が起る。
 という。私は黄泉国へ旅立って行くとはいへ
 すぐに戻ってくるから、私の畳は、決して汚
 さないで清らかにしていてほしい。いや、言
 葉でこそ、重ねといてゐるが、本当の心を
 言えば、実は、わが妻こそ、決して汚
 水ないでいてほしい。
 つまり、残してゆく妻への切なる願ひを歌
 ったものだろう。

④ なお、
 「甦とは、黄泉からかえり甦る意である」
 という。ハ「広辞苑」へ甦る・蘇る（参照）
 往古には「観念上」

$$\begin{array}{r} 10 \\ 21 \end{array} \quad \begin{array}{r} 17 \\ 21 \end{array}$$
$$2,206^P - \frac{3}{2}$$

セトリ
説示 1248^p タカン 1505^p
改定示すこと。説示 ④ 224^p のた

A simple hand-drawn smiley face with two dots for eyes and a curved line for a smile.

13.5 AM
 黄泉国へ旅立つて行っても、
 黄泉
 から帰る（かえ）
 （こと）かできる
 と考えられていた（ようである）
 また、
 よみがえる
 「甦」という字は、一度死し更に生きかへ
 る義である。故に更と生を合す
 と解説されてゐる。
 講談社へ甦（よみがえる）参照
 「大字典」上田万年

2222 8月 10月10日 2246 2368 2263 2403 2259 12月5日 10月10日
 94月と10月のこと 神嘗祭 2403 9月16日
 2222 8月 10月10日 2246 2368 2263 2403 2259 12月5日 10月10日
 94月と10月のこと 神嘗祭 2403 9月16日

懐妊の儀式

いつの頃からであつたらうか。どこからと
 もなく、すすり泣く声か聞えてくるようにな
 った。
 予て、その際、泣きは、日御子が崩れて
 から七ヶ月目が近づいてつれて、いよいよ敷
 くなつていった。

なお、春秋左氏伝に、
 礼によれば、天子は崩れて七ヶ月で葬る

とある。春秋左氏伝に、隠公元年七月条参照
 とも、参考迄に述べる。伊耶那岐命

の黄泉国訪問条には、
 「一つ火燭して入り見たまふ時に、蛆たか

れころろきて、云々
 とある。
 *天子でない伊耶那美命は、崩れて間もなく

横穴の奥の殿（玄間）に葬られたのであろう
 である。それは、指折り数えて、逆算して

末ころの宵のことであつたかも知れない
 眉形の白い月か、陽を追いかけるように

げんしやく
最素 元 1710^P

再生 元 859^P

もか
2185 2,208^P

たいまつ 元 1349^P
松明 1153^P

紀 元 98^P

は 元 1756^P

「時」の頁 19 行

あゆまを
て 懐く
く 西の山の端に隠れ、
の 時となった。
の 隅へ 向う 野辺 送り の 長い 行列 が 続い いて
棺におさめて 仮に 安置した 所から 都の 西北
殯斂の處へ 人が 死んで 葬る までの 間、 屍を
明を持って 前行する 者へ 先導 され、 静かに
静かに 運ばれて いった 日 御子の 亡骸は、
やかて、 淡い 星の 光に 包まれた 己の 塚の ふも
とに、 そっと 置かれた。
① 殯の 宮は、 故人との 別れを 惜む 所、
② 陵は、 再生の 儀式を行 う 所、
と 考えられて いた ところであ った ろうか。
＊
姻の 儀式の 時を 迎えた。
こうして、 全て が 整い、 いよいよ 最素な 婚

男女関係は結婚を重んずる
おのこは3男2女 ②22022% ③225%

ウ
エ
イ
ア
オ

大王串元1954 王串元1396
王串の美称 柳の美称

2,210^P - 1/3
拾ける 882^P
和上112

巨大な火男の厩近かに寄り添う女陰のあた
りには、火の色をうつしてほんのり赤らみ々
心待ち気であるように思えた。

やがて、真赤な衣服を着た中臣の遠祖天兒

屋命、天の字が忝えてあるのだから、
重要な人物なのだろう。

か、燃え盛っている炎の前に立っ
た。

ニコニコ、天兒屋命は、肅然と大王串(柳)
を捧げ持つと、

なるほど、神代紀の天兒屋命が人皇紀の
誰に相当するのかを詮索してみても、確たる

答は得られそうもないが、この物語で
は仮りに

三者は、同一人物なのであろう。

と解いて語を進めてゆきたい。

なお、天兒屋命という名は、本来、代

々続いた中臣伊香力美、中臣鳥賊津連の

③ ② ①
神話中の天兒屋命(中臣の遠祖)
皇紀中の中臣鳥賊津連(近江国風土記逸文中の中臣伊香力美)
魏志倭人伝中の難斗米(神功紀中の難斗米)

② 山の神(妻)の

中^{なかつ}でも、卑^ひ彌^み呼^この夫^{おと}であつた人^{ひと}に与^{あた}えら水^{みづ}た
名^な譽^よある稱^{しょう}号^{ごう}だつたろうか。

いかし、それ以降^{そののち}の中^{なかつ}臣^{しん}代^{だい}の襲^{しゅう}名^{めい}の儀^ぎ式^{しき}に
おいて、中^{なかつ}臣^{しん}鳥^{とり}賊^{ぞく}津^つ連^{れん}と

天^{あまの}兒^こ屋^や命^{のみこと}と
ていつた^{よう}と解^{とく}すことには

連^{れん}の子^こ孫^{そん}は代^{だい}々^{たい}襲^{しゅう}名^{めい}てゆき、
東^{あづま}の国^{くに}（拘^か奴^ぬ国^{こく}）を平^{へい}定^{てい}した後^{のち}

（仁^に德^{とく}天^{てん}皇^{こう}）が東^{あづま}の日^ひ辺^{へん}日本^{にっぽん}国^{こく}へ降^{くだ}臨^{りん}さる際^{さい}、
の一人^{ひとり}として、天^{あまの}兒^こ屋^や命^{のみこと}も東^{あづま}方^{かた}の新^{しん}天^{てん}地^ちへ

降^{くだ}つて、天^{あまの}兒^こ屋^や命^{のみこと}も東^{あづま}方^{かた}の新^{しん}天^{てん}地^ちへ
降^{くだ}つて、天^{あまの}兒^こ屋^や命^{のみこと}も東^{あづま}方^{かた}の新^{しん}天^{てん}地^ちへ

卑^ひ彌^み呼^この夫^{おと}であつた人^{ひと}、難^な斗^と米^{めい}と、
神^{かみ}（卑^ひ彌^み呼^こ）とが、中^{なかつ}臣^{しん}氏^しとつて最^も取^とり

大^{たい}切^{せつ}な祖^そ先^{せん}神^{しん}とす水^{みづ}、河^か内^{うち}の枚^ひ岡^{おか}神^{しん}社^{しゃ}
および大^{やまと}和^わの春^{はる}日^ひ神^{かみ}社^{しゃ}に祭^{まつ}ら

たのであろう、と推^{おし}察^{さつ}さる。（第^{だい}十^{じゅう}六^{ろく}章^{しょう}）

『大^{たい}夫^ふ難^な斗^と米^{めい}』の項^{こう}において既^{すで}述^{じゆつ}）

米

赤土

に丹 1683

由 2210-1/3 8行
燃え尽す
燃え上る 2209-19行

2210-3/3

った。

命のすぐ後には、
 酒を煮たいた
 小さな土器
 素焼
 意美志留（中臣の長男）のけなげな妻があ
 大事に抱え持
 燃え立つ巨大な炎（火男）の前には、
 陰を見据える天兒屋

米

据え

5. 主成分
屈強 634P

また、意美志留の左右両側には、火男の炎の中から取出した松明を持って佇立する屈強な二人の男がいた。この二人は、体全身の鮮やかな真紅の禪を締めただけの、裸の奴僕たちであった。

ここで思い起さるのは、和歌山市井辺ハ幡山古墳出土のいわゆる白相撲をとる力士像と称される埴輪である。あるいはこの埴輪は箕子古来の冠をかぶり下からた全体を赤く彩色し、松明を両手で持つて立っている様子を示して、土のなかでも知れたい。第二十七章倭国の文化へ庶民の服装条、埴輪に伊達宗泰、保育社、四九負参照。

そして天兒屋命は、両肘を怒らせ、真正面に向ってゆつくりと一歩進んだ。同時に意美志留も松明を持つ二人の男達も、天兒屋命にならうと一歩踏み出した。

この時、松明を持った二人の男のそれぞれの後方へ、新たに、松明を手にした真赤な裸の男達がつき従った。

そして全く同じく、天兒屋命らが歩を進め、松明を持つ新たな裸の男達が、次々に連なつてささげ持つ真赤な裸の男達

以人 元 170^p 靈妙 元 2343¹

改訂

2,213

*

その女は、つい先ごろまで、斎服殿で神え
量の血が、あたりに真赤に染めた。
校(機織)の隙、横糸を巻き縦糸の間をくぐら
せる舟形の道具で衝かれ、おびただしい
女が、磐戸の中で血を流していた。陰上が
と、その時、劈くような女の悲鳴が聞えた。
天兒屋命および先頭の後、穴の奥の方へと入
ってゆく。
摩訶不思議なこと、石窟を塞
でいた磐戸(つまり千引石)が、この時を待っ
ていたかのよう、自ずから打ち開いた。
天兒屋命および先頭の後、穴の奥の方へと入
ってゆく。
と、その時、劈くような女の悲鳴が聞えた。
女が、磐戸の中で血を流していた。陰上が
校(機織)の隙、横糸を巻き縦糸の間をくぐら
せる舟形の道具で衝かれ、おびただしい
量の血が、あたりに真赤に染めた。
その女は、つい先ごろまで、斎服殿で神え

天照大神の御婚
22/4

御服を織っていた「稚日女尊」という名の生
娘であつた。(記・紀)

稚日女尊は、三代目の天照大神が生まれ出る

とになる女人の姿の塚に塚のすなわち、三

代目の天照大神の分身に成り代つて、いま

陰上から血を流してゐるのだった。(神代紀

第七段本文参照)大量の

赤い血を流しつつ氣を

失ひ、死んだ。(記・紀)

蛇足ながら、

へこの血は、女人の形をした塚の処女膜破

開時の出血を意味してゐるのであろう

と解される。(完全なる性学者「医学博士西郷乙彦有紀書房」)

とは、一般には「神婚の儀礼」を意味する

といわれている。(「古事記」新潮日本古典集

成、五〇頁注ニ参照)

稚日女尊は、二人の男達によつて、天石窟

から陰茎中の通路をとおつて運び出された。

* こうして、包皮が剥けた。

⑤2,213 夫婦の交わりを結成した
紀上81 後 185
⑤2221 成す 1558 揚げ 意 371
ラニに存在したものを新紀に代え 2219
つくりあける。

そして全裸の男達は

一方、穴の外で二列に並らびて 巨大な火男

の陽物の形を成して いる男達は、ボラボウと

燃える松明を両手で 頭上に高く掲げ持った。

勇壮にも 一斉に ゆっくりと 腰を振り

動かし、何やら 唱和しながら、頭の上のその

火を前後に打ち振り始めた。

こうして、火の神 (火男) ひよつとこ

と 山 (妻) 阿亀) とは、始めて 夫

(性交) 見えて 交合するところを し

と 爲った。 (神代紀上第四段本文参照)

すなわち、余談ながら、 (阿亀)

へ こうしたわけ、おおかめと ひよつ

とこは 夫婦の象徴になったのであろう

と 想像される。

尚、先述の ように、おかめ (阿

亀) の面の額には 二つの小突があつて、高貴

な身分であることが示されて いるように 解さ

れる。 (第二十七章 倭国の文化 へ額の入墨 参照)

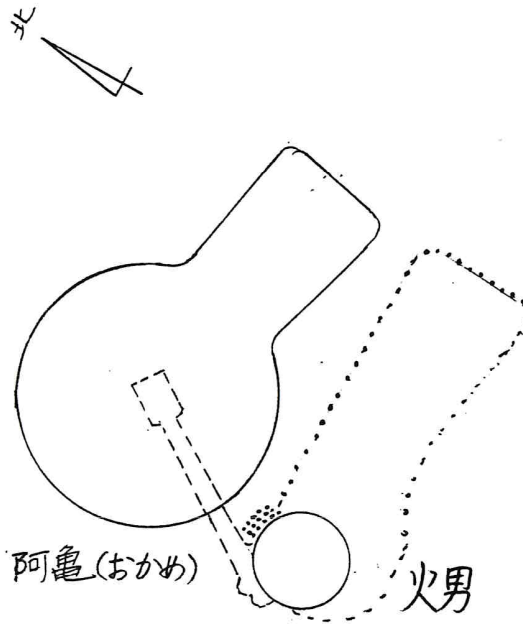
無。これは もしかしたら 外つ国の 人・梯儂を

意識しての ことなのか 知らなうか。

また、

2216^P

S 60.5.5⑤



1404

第317図 阿亀・火男和合想像図

1204

「宇和島地方(愛媛県南西部)などでは「^{えびめ}竈の火がよく燃えな^もい場合、女がその前にかか^{うわは}んで^{かまど}開陳し、火を^お吐^おき^おすと、み^おる^おみ^おる^お燃えあ^おか^おる」という。〔大間知馬三^{おおまちとさぞう}著作集〕
第2巻、1985年10月25日(第9刷)発行、395頁参照)

②220⁷-1/2, 2236^P-3/3 2行 545^P

横山の学集 甲2192-3

[V577と2] 2219°-5/5
分身 2399°-7/2 1999 2217°
「ミ=12」 2219°-1/4 3行

1421614
七福神

改行

里神楽で、おかめは、ひよつとこ一
対に用いられ、ややこつけいな役柄が多い
神楽面として福神系に属している。のちに
はこの顔容に似た女をおかめと呼び、美し
うぬ女を輕蔑していう言葉になつたか、こ
の面が作られた当時には良い人相・福相とみ
ていたと察せられる。
という。(「世界大百科事典」平凡社、へお
かめ参照)
*
それではここに、おかめは、ひよつとこ一
について、いま少し考察してみよう。
「おかめ」(東部)
三河(愛知県)の「おかめの舞」では、
は、おかめは、巫女の分身とみられ、子
み女で、巫女に代つて陽気に舞う。またおか
めは、天鈿女命の意ともいわれているという。
(「世界大百科事典」4・平凡社、へおかめ
参照)
しかしながら、全く反対に、
「子み女の天鈿女」
あまのうすめ

禁中以外で行なわれる神楽

命は、おかめ（巫女）の分身であり、
おかめ（巫女）に忝（かたじけなく）て陽気に舞う。
と解（とく）せよう。

また、鎌倉市坂の下の御霊社では、九月十
八日の祭礼に、県無形文化財の日面掛け行列
を行ない、由比ヶ浜から神社へ戻ってくる。

この行事は、
源頼朝が、隠れの里の娘を懐妊（かいたん）させた。
その一族は、身分をかくす為（ため）に面をつけ、頼
朝の外出に加わった。

という伝説によるものといわれている。
日面掛け衆は、爺・鬼・鼻長・烏天狗。
布袋・火吹男・おかめ・産婆等の十人からなる。
なお、おかめ役は、腹を大きく張（は）らませて
いて、妊婦（にんぶ）であることか示（し）されてゐる。

おかめの妊婦は、産婆役につきそわれ、面
掛け衆の最後について歩行（ヨクヨク）する。
見物人等の関心は、主としてこの子

み女（おおかめ）に集中する。
「乃（は）子（は）み女（は）の腹（はら）に女性（にょせい）が手（て）を触（ふ）れれば、安産（あんさん）

すく ち
掬う 1186

山の神 2235
杓子 1027

2218 - 2/2

H4. 24 (木)
庭休(2日)

なごり ち
名残 1656

妻 ちを

へ 山のかみ
山のかみと

のこゝとであり

という。へ「玄辞苑」へ杓子 第318・319図参照

古代から存在した

小皿状物の縁部に柄を取りつけたもので

「飯や汁などを掬う具」月くて中凹みの

また、杓子について「説小水」に

という「玄辞苑」へ山のかみ 参考

(口) 山のかみは、杓子を印として

(イ) 妻 ちを 別名 山のかみ

と ころで

昭和五十七年十月十五日 第二版第七刷 発行

548 ち 2235

という「点」が、興味深く思われる。

へ おかめは、妊婦である

ともあれ、

版、一二九頁参照

へ「にっぽんの怪神」九重京司、けいせい出

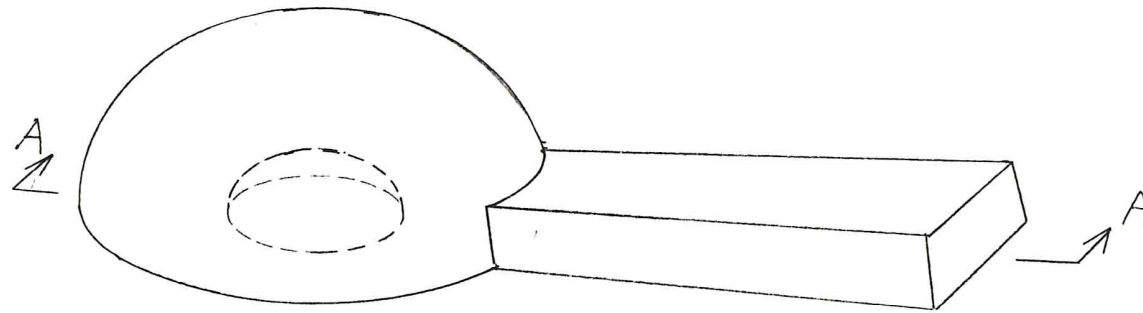
妊娠している婦人が際立って多いという。

と信じられており、見物の群集中には、

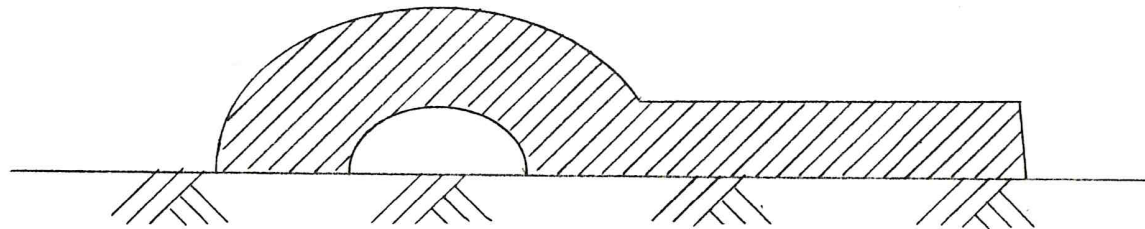
疑いなし

2,219^P-1/5

・右頁の右上(1/4)に
掲載下さい。



A-A 断面図



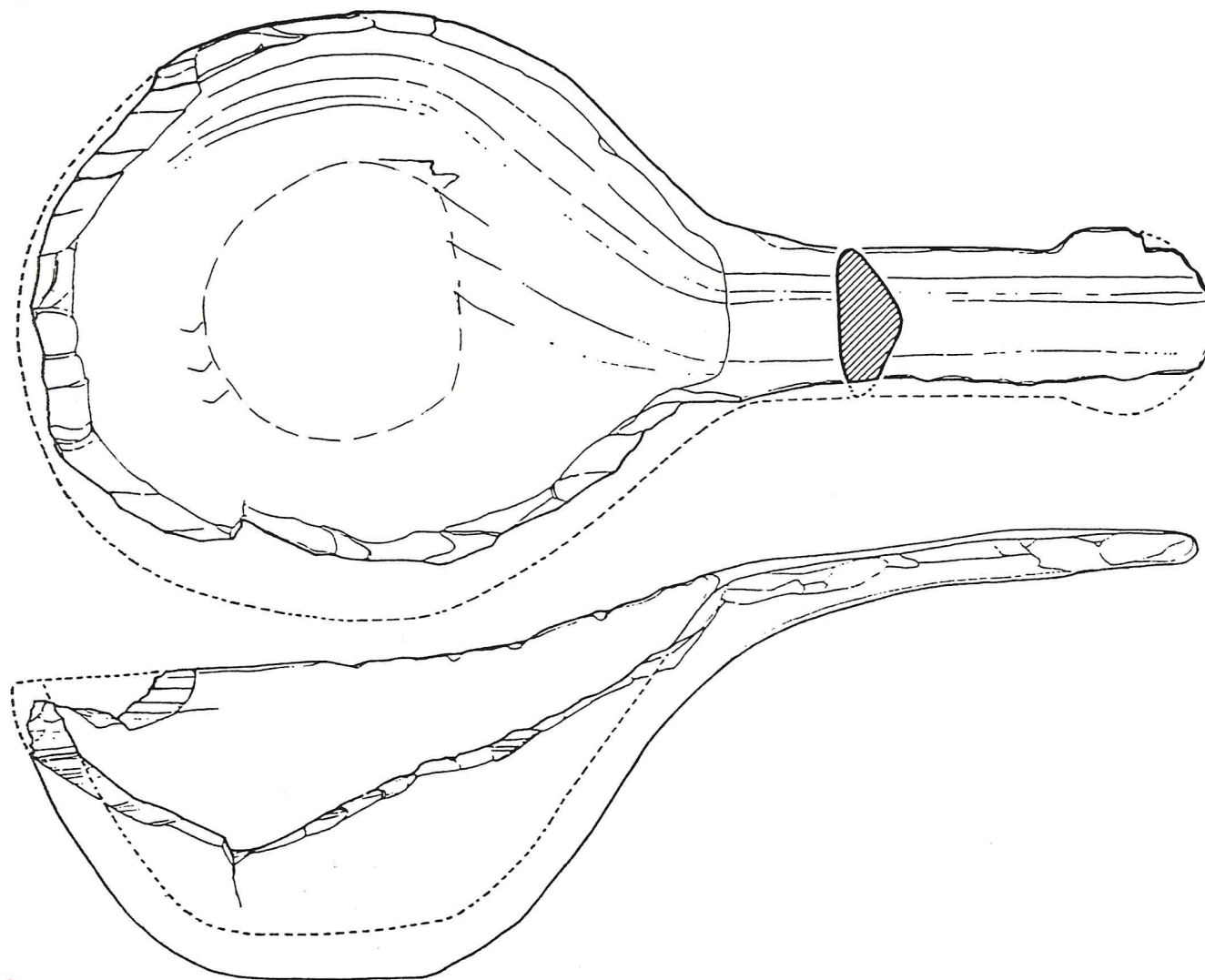
1424

第318図

伏せた杓子の図

2219P-2/5

・右頁の左上(1/4頁)と
招裁下
さい。



1409

第319回

杓子の出土例

1309

泉大津市史

第2巻 史料編 I

図版60

池上曾根遺跡出土の杓子参照。

池上曾根遺跡出土の杓子参照。

25

あたま
むね
頭と胸に
まろ
円い部分
ふいふい

見せる 2119P

無料 1941P

2.219P-4/5

山陵 934P
（こ）

棺 1871P

内部にある棺を納める主要部や腔に相当する羨道で入口と連絡するところがある、
と云うことが言える。
つまり、伏せた杓子の形状と、前方後円墳の形状とは、なかなかよく似ていゝ、
と言ひ得よう。
① 住吉の人々は、
だ女人の姿をしてゐる山陵、前方後円墳
を見て、杓子を連想したのであらう
と思われ。
＊ なお、あえて述べると、現代人は無料に
「前方後円墳は、鍵穴の形をしてゐる」と
いう。
＊ いかしなから、
へ方形部と円形部とからなつてゐる、
後円墳は、貫通してゐる鍵穴にたとえ
るよりも、
立体的な杓子になぞら
（子宮に当たる所）
隆起した墳丘
腔に相当

【おがめ】221P
もとき 2194
てきかく 的 確 21522

ひや 21893 ちやう 21659 ちやう 1387
比喩 ちやう ちやう ちやう ちやう
物事の説明に類例のものを借りて比喩する 1522

天つき
改行

改行

ひよつとこ
改行

2.2/9-5/5

えた方が、比喻としては遙かに的確である
と、感慨深く思われる。
②ともかくこういしたわけで、古代の人は、
へて妻は、山神と称し、そして又山
の神を、杓子の形に見立てたのだから
う
と想到される。
里神楽の中のひよつとこは、正しくは
もとき（滑稽な仕草をする役）と呼ばれて
火吹竹で火を吹くまねをしたり、里神楽独特
の踊りを踊ったりし、おがめと対に見られた
りする。また、ひよつとこの面は風流踊に
も用いられることがあり、古老がこの面をつ
けて踊子の中を道化て踊りまわり、なにかと
踊子の世話をするという。（「世界大百科
事典」平凡社）
● 女人の姿をした塚の前で燃え上がる火男
とこの頃は、いつの頃からか、風流え士曰梯

「ゆかく」 版3行

百科(26-25) ひまに
神楽のひまとは、正面に
向って口を突き出している

2,220^P-1/2

ほつ 火曜 2236^P-2
2215^Pの目

道化 1565^P
火男 1900^P

所作 1120^P 40合 2374^P
大仰 273^P 伸よくすること

偶^{いん}の^{トル}を指すようになったものと思われ
る。
●そーてやがて
つとこ役^{やく}を演^{えん}ずる男は、梯^{てい}偶^{いん}の所作^{しよさ}を大仰^{おおぎやう}に
表現^{ひょうげん}し、道化^{どうけ}てみせるようになったの^{ひだ}あう
う、と想像^{さうぞう}さ小^こる。
■^{トル}な^{トル}あ^{トル}日^{あかめ}阿^{あかめ}亀^{ひま}・火男^{ひま}和合^{わがひ}の^{ようす}様子^{ようす}を、上^{いさう}空^{くう}
の^{たか}高い^い位置^{いち}から見^みおろしたならば、
見^みようによつては、
の^{くち}口^{くち}が長^{なが}く伸^のびてい^{はう}るとこ^{はう}う
の^{くち}口^{くち}が長^{なが}く伸^のびてい^{はう}るとこ^{はう}う
とも解^{かい}釈^{しやく}できよう。^{第 317 図 参照}
●そ小^こに^こーても、日^ひひよつとこ^こは口^{くち}を異^い様^{よう}
な^なま^なで^なに突^と出^{しゅつ}させ^ていて、注^{ちゆ}目^めさ^るる。
●里^{さと}神^か楽^が面^{めん}の日^ひひよつとこ^この^{くち}口^{くち}は前^{ぜん}方^{ほう}に長^{なが}
く突^とき出^でてお^り、
日^ひひよつとこ^この^{めん}面^{めん}の^{くち}口^{くち}は横^{よこ}向^むきに曲^まか^つて
伸^のびてい^る。(「世界大百科事典」平凡社
へひよつとこ^こ参照)
●ともあ^れ、古^こ代^{だい}の人^{ひと}々^々は、日^ひ火^を男^{とこ}の^ひひよ
つとこ^この^{くち}口^{くち}がど^んど^ん伸^のびてい^って、日^ひお

かみらの口に接すると解いたのであらう。

■ とはいえ、東北地方の竈の上にかけられた

面口火男^{ひをとこ}がなま^なまって、口^{くち}ひよつとこ^{ひよつとこ}にな

ったの^だう^うとする説^{せつ}があり^{あり}、ほとん^{ほとん}ど定^{てい}

説^{せつ}化^かして^{して}いる。

・ しかし、東北地方の口火男^{ひをとこ}の面^{めん}が、こ

な^なにまでも全^{ぜん}国^{こく}的^{てき}なものにな^なったとは、考^考え

にく^{にく}い^いよう^{よう}に思^{おも}わ^われる。

・ なにしろ、東北地方が平定^{へいてい}されたのは、ずい

ぶん^{ぶん}後^{こう}年^{ねん}にな^なってからのようである。

ト
「日本政府による蝦夷征討が開始され、中

央^{ちやう}人の蝦夷^{えみ}への関^{かん}心^{しん}が高^{たか}まったのは、七世^{しちせい}紀

以降^{いご}のことと考^考えら^られる。

という。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系

岩波書店、五九六頁、補注七一―一参照)

*

せいけん 精悍 221P

おき 眼差 2022

ようめ 容赦 2220
2221P

2221P

ボシタ 祭り 2221P
えいほう 火の国 132P
交合 2236P

えいほう 火の国 132P
交合 2236P
えいほう 火の国 132P

ほのお 炎 2047P

ずらりと二列に並んだ松明の炎は、まるで
脈動しているかのように前後に打ち振られ、
真赤な尾を引いて揺らめいて、油光りする
男達の赤い顔や肌を、キラキラと照らした。
男たちは、足結、膝頭の下で結んだ紐は、青色で静脈
と一斉に声を揃えて唱和し、松明を打ち振り、
腰を前後に動かして続けた。
なお、火の国・熊本では、交合することを
コボボすると言っている。
いうまでもなく、全く定かでないが、
はあるが、この地方では、
うボウする、と称していた。
火の粉は飛び散って、男たちの肩や腕に降
りかかった。
そして、狂う火の粉は、精悍な男達に
授けられ、女陰の間近に、と佇んでいる若者
の上にも、容赦なく降り注いだ。
それは、小さな土器を手にしたまま、真剣
な眼差しで陰の入口を覗き込んでいる、
志留した。

(写真版 295 参照)

$2,222^P$

12月5日の10月10日受は、
翌年の9月15日(神嘗祭)である。

HIV

コクヨ ケー-20 20×20

ようば 元 せ た 攻め立つ 元/255^P
元 2240 元 285^P 2,223^P

寸時たりと 大勢 276^P

一、か、本来倭国の大王であるべきはずの
月読尊の姿だけは、その大勢の者達の中
に見い出せたと出来なかった。

月読尊は、日東国（九州東部）の豊国を
一歩たりとも離れられない状況にあった。

① 先ず第一には、豊国の東の強国、拘奴国と
の戦いか、いまままた新たな局面を迎えていた
からであった。

倭国の中心的役割りを果たしていた女王曰御
子の死を聞き知った拘奴国の兵達がい

「今こそ好機とばかりに、倭国との国境を侵し、
とばかりに、果敢に攻め立てて来るのを、
月読尊は、自ら下知して防がなければならな

かった。

② 第二には、倭国国王を勝手に名告る素戔
鳴尊の軍勢が、要所を嚴重に固め、

「いざ、ござんなれ
の構えを見せていたからであった。

東と西の両方から挟み撃ちの形となってい

送葬, 馬也參(3 元 1788'
②2231 644 HU

面兒

⑤ 元江93 2247 紀93 2,225 ⑥ 2247P ⑦ 2247P ⑧ 2247P ⑨ 2247P ⑩ 2247P ⑪ 2247P ⑫ 2247P ⑬ 2247P ⑭ 2247P ⑮ 2247P ⑯ 2247P ⑰ 2247P ⑱ 2247P ⑲ 2247P ⑳ 2247P ㉑ 2247P ㉒ 2247P ㉓ 2247P ㉔ 2247P ㉕ 2247P ㉖ 2247P ㉗ 2247P ㉘ 2247P ㉙ 2247P ㉚ 2247P ㉛ 2247P ㉜ 2247P ㉝ 2247P ㉞ 2247P ㉟ 2247P ㊱ 2247P ㊲ 2247P ㊳ 2247P ㊴ 2247P ㊵ 2247P ㊶ 2247P ㊷ 2247P ㊸ 2247P ㊹ 2247P ㊺ 2247P ㊻ 2247P ㊼ 2247P ㊽ 2247P ㊾ 2247P ㊿ 2247P

ここに意美志留は、
■ 神の濃緑の葉は、酒の雪を滴らせながら、
身慰するよう地震えた。
「火男は乃ち大樹に向かつて放尿まった」
・ 当時の人々は、あるいはそう考えたのではな
かろうか。(神代紀) 第五段一書第六参照
■ 尚、尾には「交る」ツルムの意味
がある。交った当初に珍み出てる透明な液(陰茎基
近のクハ腺)から出る分泌液)のこを「尿」の
「完全なる性生活」医学博士西堀之彦「有記書房、五七頁、七四
字で表現しているのかも知れない。
・ つまり、放尿まった(放尿した)のではな
くて、放尿まったのであろう、と思われる。
■ 因みに述べると、神代紀(五)第五段一書第六
には、こう記されている。
「放尿に云はく、伊奘諾尊、乃ち大樹に向ひ
て逃げて帰る伊奘諾尊を追って、泉津日狭女
其の水を渡らむとする間に、伊奘諾尊、已
に泉津平坂に至しましぬといふ」

筆子也。

